

第百四十三話 文明の衝突？（BC級裁判、日吉事件）

BC級戦犯裁判に係る記録等を読むと、サミュエル・P・ハンチントンの「文明の衝突」を思わずには居られない。百四十二話で紹介した書籍「大東亜戦争秘録 鎮魂の旅」所収の「B29搭乗員を介錯した武士道の顛末」には現代的な意味における安楽死問題も絡み、日本と欧米諸国との文明の衝突を考えさせられた。以下簡単に所謂「俘虜斬首事件」を紹介する。

1 本土空襲墜落米機搭乗員の取扱と俘虜斬首事件

大東亜戦争末期になると、米軍の本土空襲は熾烈さを増した。（第五十四話参照）しかしながら、撃墜された米軍機もかなりの数となり、落下傘降下した搭乗員が俘虜（捕虜）となった。600人に近いとも云われている。

このような中で起きたのが、所謂俘虜斬首事件、又は日吉事件(エムリー事件)とも称される。

○関係者：満淵正明中尉（神戸出身、元神職）147師団426連
隊第1大隊第1挺身中隊中隊長

○場所：千葉県長生郡日吉村（現在の長柄町榎本）長栄寺

○発生年月日：1945年5月26日（土）

○事件経過：

米軍のB29戦略爆撃機が千葉県長生郡の日吉村の田に墜落した。11人の乗組員の内、4名即死、5名はパラシュートで脱出、2名が重傷であった。重傷の2名と4体の亡骸は、長栄寺にリヤカーで運ばれた。

長栄寺では駆け付けた大隊付の軍医が重傷者二名の診察に当たっていた。軍医は、これ以上の手当ては出来ないとして立ち去った。重傷の一名は死亡、重傷のエムリー少尉も回復の兆しがなく、危篤状態が続いた。

同日午後、満淵は、痙攣を繰り返す少尉の様子を見るに忍びなく、部下の曹長と「介錯」の必要性について議論していた。が、遂に決断し、曹長に楽にしてやれと命じた。首の皮一枚を残しての正しい作法通りの介錯が行われた。

○戦犯裁判：1946(S21)年1月下旬、満淵は巢鴨拘置所に拘束、4月5日から裁判

新聞記事には「介錯は是か非か」「戦犯公判で日本武士道の論議」との見出しの記事が掲載された。4月20日判決 絞首刑

○双方の主張

検事側：常識的に残虐行為という他なし、人道に反する。

弁護側：介錯は復讐ではない。助かる見込みなく、斬首して楽にする行為が武士道、他の5名の生存者には危害を与えていない、鄭重に埋葬した。

○尚、日本政府・軍は、彼等が国際法に定められた捕虜ではなく、無差別爆撃を行った戦争犯罪人であると見なしていた。

2 論点は？

(1) 介錯は安楽死か？ 本人の同意なき介錯をどう判断する。

(2) 安楽死は許されないのか？

(3) 安楽死の方法としての介錯の適否は？

(4) 但し、少尉の亡骸で刺突訓練を見習士官が実施させた。住民が見守る中での介錯は、復讐の要素もある？

* 軍事法廷自体に対する批判はさておき、BC級戦犯裁判も検察側の一方的な主張のみを採り上げた裁判であることは明らかだ。日本文化に対する理解なき、一方的断罪である。勿論残虐行為が全くなかったとは云わないが、・・・冤罪も多かったろう。

(第百四十三話 了)

